

わが国の口話法の歴史

～口話法の「第一の波」と伊澤修二～

【発表者】 東京都 野呂 一

【グラハム・ベルと伊澤修二の写真】

ここに興味深い写真があります。外人は、有線電話を発明したアレキサンダー・グラハム・ベル夫妻とその令嬢です。日本人は、近代教育の開拓者と称される伊澤修二夫妻です。

この写真は、伊澤修二の生誕地である長野県上伊那郡高遠町立歴史博物館で発見されました。

明治31(1898)年11月、ベル一家が来日して東京盲啞学校で講演したときに、東京にあった伊澤修二の家で撮ったものだそうです。今年1月に中日新聞に掲載されていた記事をたまたまインターネットで発見して、6月に現地を訪れて本物の写真を見せてもらいました。ろう教育史の研究上、貴重な写真です。

今回は、わが国の口話法の歴史研究を、明治から大正時代、大正末期から現在の二つの波に分けて研究することを提案するとともに、口話法の下地を築いた時期ともいえる「第一の波」について、伊澤修二にスポットを当て、彼とグラハム・ベルの出会いが、わが国のろう教育に大きく影響を与えたことについて発表したいと思います。

【伊澤修二とは】

伊澤修二は、嘉永4(1851)年6月29日、現在の長野県上伊那郡高遠町で下級武士の子として生まれました。

大学南校(東京帝国大学)を退学後、文部省に入り、そして明治8年7月から11年5月までの間、師範学校や音楽教育の研究調査のために、わが国最初の留学生としてアメリカに派遣されました。

「蝶々」「蛍の光」など皆さんになじみ深い学校唱歌は、伊澤のアイデアによって生まれたものです。西洋の明るい曲に日本語の詩をつけて近代的な音楽をわが国にもたらしました。音楽が情緒教育に効果的であり、さらに明治初期のわが国の日本語を統一する意図もありました。のちに東京音楽学校(現在:東京芸術大学)の初代校長をつとめたり、学校で用いられる教科書の編纂を進めたり、台湾の植民地教育など他にもいろいろな業績をたくさん残しています。東京盲啞学校の校長もつとめました。貴族院議員を経て、晩年は吃音者教育に力を入れ、明治36年3月に吃音者の矯正を目的とした「楽石社」を創立しました。彼は、まさに近代教育の開拓者(ブルドーザーともいえる)であったといえます。

大正6年5月3日、脳出血のため67歳で亡くなりました。視話文字が刻まれた墓は、東京の雑司ヶ谷墓地にあります。伊澤の性格は、負けず嫌い・潔癖・几帳面・正直・誠実・涙もろさにまとめられると評価されているようです。

【伊澤修二の視話法習得】

明治8年からのアメリカ留学中、伊澤はすでに習得していたオランダ語の強い発音グセがあったために、アメリカで英語の発音矯正にかなり苦労していました。そのために音楽の研修も遅れていました。

明治9年7月、アメリカ独立100周年を記念した博覧会がペンシルベニア州フィラデルフィア市で開催されました。

そのとき伊澤は、マサチューセッツ州が出品した奇妙な文字表を発見します。これは何かと聞いたら、啞者に発音を教えるための文字で、この発明者がグラハム・ベルの父であるアレキサンダー・メルヴィル・ベルだということを知りました。この発音文字こそ「視話法(ビジュアル・スピーチ)」の要であり、現在のわが国の口話法につながっていくものです。

メルヴィル・ベル(1819～1905)は、スコットランドのエジンバラ出身で、ろう教育の実践者でありました。ヨーロッパの共通文字として「視話文字」を発明したが受け入れてもらえず、カナダへ渡って啞者の教育に用いるようになりました。彼の妻(グラハム・ベルの母)は中途失聴者で、画家でありピアニストでもありました。

グラハム・ベル(1847～1922)は、父のろう教育を助けて視話法の普及につとめました。彼の妻メーベルはろう者で、彼女の父、G. G. ハーバートが1867年に創立したのがアメリカ最初の口話学校として名高いクラーク聾啞院です。ベルが彼女のために視話法による音声を電氣的に伝える研究をした結果、副産物として生まれたのが電話機です。

伊澤は、展覧会で視話文字を発見した時、「啞者でもものが言えるようになるのなら、普通人の発音矯正が出来ない道理はない」と考えました。彼の末弟、末五郎が吃音者であったことも、視話法の積極的な習得の要因になっています。

伊澤はさっそくグラハム・ベル訪ねました。その頃ベルは電話機の発明に大変苦心していたのですが、伊澤の発音を矯正しながら自分も日本語を勉強しました。やがて電話機が発明され、ベルと伊澤は日本語によって世界最初の通話テストを行いました。これは母音で終わる日本語の方が英語よりはっきり聞き取れることに着目していたためです。

【わが国最初の口話教育】

伊澤は明治11年、父の危篤の連絡を受けてやむなく帰国しました。その年は京都盲啞院が開校した年ですが、伊澤はしばらくの間、ろう教育には関わっていませんでした。その頃、口話法の実践がなかったわけではありませんが、京都盲啞院の古河太四郎が経験論に基づいて発案した手勢(手話)法によるろう教育が中心になっていきます。

東京盲啞学校の教師であった小西信八は、視話法で啞者も話せるようになるとの伊澤の発表を聞きつけ、教え子の吉川金造、江島安之助の2人(堺熊次郎を加えた3人との記録もある)の生徒を連れて、明治19年1月に伊澤を訪問、視話法の伝授を受けました。これがわが国最初の口話法教育であるとされ、豊橋聾学校になじみの深い吉川は11回の通学でしゃべれるようになったとのこと。

こうして伊澤は、わが国のろう教育に関わるようになっていきます。わずか3ヶ月間ですが、明治23年6月から小西の在籍する東京盲啞学校の校長もつとめました。

小西は、視話法の成功を目にして手勢法しかなかったろう教育にさらなる可能性があることを再確認し、話せるようになった生徒を連れて全国各地を回り、口話を実演、視話法を実証していきました。その頃はろう者がしゃべれるとは思いませんでしたので、それを聞いた人々は驚嘆したようです。小西のとった視話法は、授業前に生徒全員に五十音を発音させ、その能力のある生徒には別の時間に特別の注意を払って、これを教授するといった柔軟な方法でした。

しかし、正式に視話(口話)法を積極的に採用した聾学校はほとんどありませんでした。

【グラハム・ベルの来日】

明治31年11月、視話法について世界各地を講演していたグラハム・ベルが夫人と令嬢を伴って来日、伊澤と劇的再会を果たしました。11月12日伊澤の通訳により、東京盲啞学校で講演をしました。長大な講演でしたが、わが国のろう教育に大きな示唆を与えました。内容は「啞子教育談」にまとめられています。講演の趣旨は以下の通りでした。

- 聾学校の教員養成機関を設置すること。
- 盲と聾とを分離して各府県が必ず、一つの盲学校と聾学校とを設けるようにすること。
- 協会を設けて、聾児の教育について、「社会に刺激を与え、公衆の感情を興起することが、至極よろしくはないかと思う。」と奨励したこと。
- 聾学校において口話方式を採用すること。
- ろう者の社会的地位の向上と社会の理解を広めること。

東京盲啞学校校長であった小西は、この勧告を受けて明治36年4月、東京盲啞学校内に「教員練習科」を設けました。ろう者卒業者は大正13年まで多数いましたが、それ以降はまったくなくなってしまいます。偶然にもその年は、昭和9年から新潟県東頸城郡小黒村で村長を12年間つとめた横尾義智が、姉トシとともに東京盲啞学校に編入した年です。

また小西は、明治32年7月、盲聾分離を文部大臣に上申、しばらくして明治43年に東京盲啞学校を東京盲学校と東京聾学校に分離させました。それに合わせて、教員練習科を師範科に変更しました。急速な盲啞学校の増設に伴い教員養成が急がれていたためです。さらにろう者の結束のために、ろうあ協会に対する支援も積極的に行いました。

残る視話(口話)法について、小西は、筆談と手話による教育法に傾き口話を積極的に採用しなかったと、後に川本宇之介は批判しています。小西の真意は定かではありませんが、ろう児の発音習得の限界に気づいたのか、日本語の習得は話し言葉より書き言葉の方が効果的だと認識したのか、明治29年12月から31年9月までの欧米ろう教育視察で「純粹の発音法はろう者に便利なものとはいえない」と語ったことを含めて、今後十分検証していきたいと思います。

【視話法の発刊と楽石社】

伊澤は、50代に入り視話法に専念するようになります。明治34年4月、アメリカ留学で得た視話法を集大成して『視話法』を発刊しました。ベルの視話法とは、音声を精密に表示する方法の一つであり、以下8つのねらいがありました。

- (1) 国語標準音の確立、(2) 言語転訛の矯正、(3) 方言の研究保存、(4) 言語系統の究明、(5) 外国語音の伝習、(6) 世界共通語の成立期待、(7) 聾啞に談話の教授、(8) 文盲の一掃

明治36年3月26日、東京盲啞学校と同じ小石川区に「楽石社」を創立、吃音者に対し視話法による本格的な吃音矯正事業を開始します。さらに伊澤は、「視話字原」と「発音記号」を発表し、ろう児に発音の道を開いていきました。

吃音者であった末弟末五郎を助手としてわずか7名でスタートしたこの事業は、大正8年(伊澤没後の翌々年)に開かれた楽石社創立15周年記念会の発表で5,367名の吃音矯正がなされたというように大きいものになっていきます。

明治34年5月27日伊澤は、かつての教え子であった吉川金造を擁する豊橋盲啞学校を訪れ、ベルの視話法について講演をしました。吉川は、1年前の明治33年4月に惜しまれつつ東京盲啞学校を退職、豊橋に赴任していました。

【ド・レペ200年生誕記念会】

明治44(1911)年7月、東京盲学校で第3回全国盲啞教育大会の中で、ド・レペ200年生誕記念会が開かれました。ド・レペ(1712～1789)とは、フランスで世界最初の公的な聾学校を設立、「身振り語は聾啞者の母国語である」と考え、ろう者から手話を学びながらフランス語と結びつけて方法的手話を編み出し、ろう教育を実践した僧侶です。

小西校長のド・レペ評伝紹介の後、貴族院議員になっていた伊澤は祝辞を述べました。彼はド・レペに敬意を示しつつ、あえて手話を否定し、聾啞者が常人の生活に入るためには「視話法」が有効であることを強調しました。その全文を別紙に紹介します。これは、明治時代のろう教育実践者に共通する思想として読みとれて興味深いものです。

「聾啞教育の問題としては、手真似によるがよいか、或は発音によるがよいかということは非常に大問題である。」

「私の知っている所によると、全国中で発音法を主としている学校は唯一校あるようで、即ち北海道の小樽の盲啞学校で小林運平という人が発音法を主としているだけである。」

「聾啞としては手真似で談話するのは自然である。」

「発音法を施行する学校では手真似を禁じて発音法だけを行って初めて成功するのである。」

「社会の人に直ぐ分かるようにするには発音法でなければ甚だ不便である。だからして聾啞にはまことに気の毒であるけれども、やはり発音法を強行する方法を取ることは必要ではないかと思う。」

ろう者を人間として認め、ろう者にとって手真似が好都合であることを認識していながら、時代が許さないからろう者に我慢してもらうしかないし申し訳ないとするところに着目すべきでしょう。

【小樽聾学校と小林運平】

前記の伊澤の祝辞にあがった小樽盲啞学校について簡単に紹介します。

創立者は小林運平(慶応元(1865)年～大正5(1916)年)で、当初は小樽区量得尋常高等小学校の主席訓導でした。近くに住む数人のろう児が入学を希望したのをきっかけに、ろう児も同じ人間であるとして個人指導を開始しました。

わらをも掴む思いでろう教育方法を探索していたところ、明治36年9月号の「北海道教育雑誌」に掲載されていた「吃音の矯正 一伊澤修二氏談話一」を発見、東京から伊澤修二著の「視話法」をとりよせて研究を開始します。ろう児に手鏡を持たせて指導したところ、効果が表われ言語を発するようになったことで勢いがつき、明治38年7月に上京、伊澤に師事して視話法に関する知識を深めました。その後数回ろう児を連れて上京、伊澤から発音法を習得させました。

東京盲啞学校の小西信八校長、石川倉次(日本点字の発明者)から盲啞学校の設立を勧められたこともあって、翌年明治39年6月3日に小樽盲啞学校を開校しました。

わが国で口話教育を全面的に打ち出したのは、おそらく小樽盲啞学校が最初ではないかと考えられます。しかし小林は、口話を推進するために手話を禁じたりはしませんでした。失聴年齢によって口話習得にばらつきがあることを把握しており、口話の習得が難しい児童には手話を教えるという柔軟さで、教師たちも手話研修に励んでいました。

先日函館市立図書館で、大正時代の小樽盲啞学校の絵葉書を発見しました。講堂の壁に伊澤修二と小林運平の肖像画が並んで掲げられ、授業を受けている模様が写っていました。伊澤の教授法を高く評価していたことが伺えます。

北海道には明治28年に開校した函館盲啞院もあり、大正11年から就任した佐藤在寛(明治9年～昭和31年)院長を中心として手話法による教育が積極的にされていました。昭和5年の函館盲啞院報告の中で「最近口話法が盛んに提唱されているが、ろう者にとって手話は自然な方法である。口話の可能性は認めるが、限られた時間で職業を身に付けて社会に適応していくには手話の方がはるかに合理的である。手真似主義の方が簡便だと思う。」と明言しています。

【さいごに】

経済学では、「景気変動」を大きく分けて、キチンの波(在庫投資活動を原因とする約40ヶ月の波)、ジューラーの波(設備投資変動を原因とする約8～10年の波)、コンドラチェフの波(技術革新を主因とする50～60年周期の長期的な波)の3種の経済周期があるとして研究がなされています。このように「波」でとらえた学問は他にもみられます。

この「波」の考え方をろう教育史の研究にはめることは甚だしく無理がありますが、今までの研究で気づいたことは、伊澤が没して7年後の大正13年を境として、わが国の口話法に二つの波があったのではないかとことです。

ろう教育の歴史を考えていくにあたり、この二つの波に応じて研究方法を分けることで、より正確なろう教育史に迫るのではないかと考えました。今回は、第一の波の中心として伊澤修二を取り上げました。彼の業績があったからこそ、後に述べる川本らによる口話法推進の直接の引き金になったのではないかと考えたからです。

わが国の口話法に対する考え方が大きく変化した大正13年といえば、口話教育の大家と称される川本宇之介が2年間にわたるろう(口話)教育の欧米視察から帰国、東京聾啞学校に赴任した年です。手話を守り適性教育を掲げた高橋

潔が、大阪市立聾学校の校長に赴任した年でもありました。また、多くのろう教師を擁し、手話教育を重視したとされる浜松聾啞学校が創立されたのもこの年です。ところが今、浜松聾啞学校の歴史は、口話法を誇張する『言霊(ことだま)』の額に封印されてしまっていることに気がつける必要があります。

明治から大正時代にかけてのろう教育の特徴として、手勢法による教育が中心であり口話を全面的に採用する学校は皆無に等しかったのですが、伊澤修二や小西信八の尽力により視話(口話)法の優位性を認識する学校が増えています。しかし小西自らも口話法を積極的に採用しなくなり、口話法の盛り上がりは次第にしぼんでいきます。

川本は大正14年、愛知県立盲啞学校校長の橋村徳一、娘はま子のためにろう教育に傾倒した滋賀の西川吉之助と手を組んで「日本聾口話普及会」を結成、「口話式聾教育」を発刊し口話法の徹底的普及と手話の排他を開始します。大阪の高橋、函館の佐藤らとの手話・口話論争を巻き起こしては政治家や文部省を動かし、昭和8(1933)年1月27日文部省内で開催された全国盲啞学校校長会議の開会式で、鳩山一郎文部大臣による「手話より口話の推進を」との訓辞を引き出し、口話法の優位性が確立されます。多くのろう学校がこぞって口話法になだれ込むとともに、多くのろう教師たちが追われていきました。そして口話法の第二の波は限りなく大きく跳ね上がっていきます。

伊澤の評価に触れますが、これはかなり難しいといわざるを得ません。手話を排した現在の口話教育を「悪」と認識すればアメリカから視話法を持ち帰った伊澤は「悪役」ということとなります。しかし、ろう教育の可能性を切り開き、口話の便利さをわが国にもたらしたとすれば伊澤は「善人だった」といえるかも知れません。まだ歴史的検証が不完全でここに結論を出すことはできませんが、伊澤を中心とした第一の波の基本は「ろう者としての人間性を追求した教育」にあり、それを踏まえた上で口話の可能性を探っていたのではないのでしょうか。それに対して、非人間的なろう教育への急な変換が第二の波の軸になるのではないかと考えます。

今後ろう教育の歴史的検証を徹底的に繰り返すとともに、第二の波の中心をなす川本宇之介の生涯にメスを入れていきたいと考えています。

【主な参考文献】

- 上沼一郎『人物叢書 伊澤修二』日本歴史学会編集 吉川弘文館 昭和37年
上野益雄「アメリカ聾啞史にみる障害児観」社会事業史研究第22号 社会事業史研究会
市橋詮司『聴覚障害教師の嚆矢 吉川金造先生』平成10年
橋本綱太郎『盲啞教育の師父 小西信八先生 小伝と追憶』日本聾啞協会外 昭和13年
平中忠信「小林運平と小樽盲啞学校 一明治期の盲啞教育一」北海道社会福祉史研究第4号 1996年
野呂一「ろう者村長・横尾義智」『現代思想』臨時増刊号 青土社 1996年
那須英彰・須崎純一『藤本敏文』筑波大学附属聾学校同窓会 1998年
清野茂「佐藤在寛と私立函館盲啞院」市立名寄短期大学『紀要』第25巻 1993年
清野茂「佐藤在寛と昭和初期聾啞教育」市立名寄短期大学『紀要』第27巻 1995年
清野茂「昭和初期手話・口話論争に関する研究」市立名寄短期大学『紀要』第29巻 1997年
川渕依子『手話賛美 手話を守り抜いた高橋潔の信念』サンライズ出版 2000年
山本実『川本宇之介の生涯と人間性』昭和36年
高山弘房『口話教育の父 西川吉之助伝』湘南出版社 昭和57年
東京教育大学附属聾学校『東京教育大学附属聾学校の教育 一その百年の歴史一』昭和50年
文部省『盲・聾教育八十年史』昭和33年
筑波大学附属聾学校同窓会『筑波大学附属聾学校同窓会百年史』平成3年
筑波大学附属聾学校同窓会『同窓会名簿』1996年
東京都立大塚ろう学校五十周年記念誌『大塚五十年の歩み』1977年
私立函館盲啞院「私立函館盲啞院要覧」(大正4年～昭和5年)
北海道函館盲学校・北海道函館聾学校『沿革史』昭和32年